

備忘録～理事長の独り言④～

鳴海 明敏

タイトルを「理事長の独り言」としてみたものの、法人における理事長の仕事は予算関係や諸規定の改正など皆無ではないのですが、こどもたちに関わるようなことでは児童心理治療施設の方からも児童発達センターの方からもさっぱりお呼びがかかりません。それは、どちらも園長や管理者によって順調に運営されているからなのですが、私としてはいかにも手持無沙汰で、独り言のネタも見つかりません。

ということで方向を少し変えて、学生時代に始まり現在もなお関り続けている『カウンセリング』に関連して、父のことや青森カウンセリング研究会のこと、「ロジャーズと友田不二男」や「カウンセリングとフォーカシング」などのテーマで、私のこれまでの歩みを振り返りつつ、思いつくままに書いてみたいと思います。

私は、大学で心理学を学ぼうと思って国立一期校と地元の国立二期校を受験し、結果的に地元の弘前大学に入学したのですが、心理学を学ぼうと思ったのは、戦前の早稲田大学の哲学科で心理学を専攻した父の影響です。いまこのように書き始めてみて、何故、父が心理学を専攻したのか聞いたことがなかったことに気が付きました。

父は、弘前市内で紙類全般を扱う商店の、男兄弟の三番目として生まれました。長男は学業優秀で帝大に進み家業は次兄が継ぐことになっていたもので、父は自由に進路を決めることが出来たのでしょうか、大学を卒業後、岡山市内の出版社に就職して少年向けの科学雑誌の編集に携わっていたそうです。戦後は高校の教員をしていた父なので、この職業選択の経緯は謎なのですが、これもとうとう聞かずじまいでした。父との関係を思い返すと、特にわだかまりがあったわけではないのですが、私の方から踏み込んで、フランクに胸の内を尋ねることを躊躇させるような何かがあったような気がします。

戦争が始まり、招集されることになった父は、故郷に帰り急遽母との婚姻を済ませ、出征しました。父が配属された部隊は、満州の北部でソ連軍と対峙し、国境を守ることが任務だったそうです。具体的な戦闘がないままに、戦況の悪化にともない、本土防衛のために部隊の一部が配置換えとなり、それで父は内地に戻り福岡県内で陣地の構築をしていて終戦を迎えたそうです。内地で終戦を迎えたので、シベリアにおくられることもなく、故郷に戻ることが出来たそうです。

戦後は市立女子高の社会科の教員をしていましたが、やがて、指導主事として市教委・県教委へと異動しました。直接父に確かめてはいないのですが、おそらく教育相談担当の指導主事として、学校現場に教育相談を導入するための仕事だったのだらうと思っています。

私は、戦後に長男として生まれ育ちました。私の下に、弟と妹が生まれましたが、子育ての中心は母親で、父親が子育てに口をだすことはほとんどなかったような気がしています。父に叱られて、叩かれたという記憶もありません。母親は、子どもを育てるうえで、どのように育てたらいいのかと質問したら、「叱らないようにしてくれ・・・」とだけ言われた、と話していたことがあります。

大学進学の際に、心理学を学ぼうと思ったのですが、その決定に対して父からの指示もありませんでした。でも、地元の大学の心理学科に合格が決まった時に、嬉しそうに自分の本棚から心理学関係の本を持ち出してきた父の姿を見て、浪人して一期校にチャレンジしようという意欲が消えたことは、今でも記憶にあります。

大学紛争の余波で、周回遅れの本部封鎖や機動隊の導入、内ゲバなどもありましたが、学年が進むに連れて、授業よりも部活動に精を出し、酒も煙草もという私の生活にたいしても、ほとんど口を出したことの無い父でした。しかし一度だけ、青森市で「カウンセリング・ワークショップ」という研修会が開催され、そこに、日本のカウンセリング界の第一人者友田不二男という人が来るので、お前も参加してみたらどうか、と勧めてくれたことがありました。4年生になる春休みのことでしたが、父の勧めに応じてこのワークショップへ参加したことが、私と「カウンセリング」の関りの始まりでした。

青森県教育センター（青森市桜川）の主催で、1971年（昭和46年）2月13日～14日の一泊二日の日程で開催されたこの「カウンセリング・ワークショップ」は、日本カウンセリング・センターで2年間学んだ後、青森市で中学校教員をしていた工藤和仁が、県教育センターの主導主事になって企画・実現したもので、県内では、最初のカウンセリング・ワークショップでした。研修の世話人として、県外から友田不二男、斎藤多喜子、梅津洋作の3人が、県内からの山鹿素、小宅大典、徳差敬哉、藤原保、工藤和仁の5人は、県内のカウンセリング研究会のメンバーでした。参加者は、県内の小・中・高の教員で、約120名でした。今思うと、県内の教員対象の研修会に学生の私が参加出来たということは、父が後ろで手を廻してくれていたのでしょう。

青森カウンセリング研究会は、このワークショップを第1回として、工藤和仁が中心となり県内でワークショップを開催するようになり、中断もありますが、現在も年一回開催されています。今年も、6月に第52回目の開催を予定しています。また、県内で「カウンセリン

グ」ということで学習する仲間の塊は、弘前市周辺や八戸市周辺にも広がり、それぞれ現在も活動を続けています。

父が、私にこのワークショップへの参加を勧めてくれたのは、自分が北海道の定山溪で開催された、日本カウンセリング・センター主催の9泊10日のワークショップに出張ということで参加した経験があったからでした。その時の体験を、私に次のように語ってくれました。「いつ、何について、どうするのかというような研修プログラムはないということ。各自が、それぞれの問題意識に応じて研修するのだということ。初めのうちは長い沈黙が続いて、面食らったということ。終わってみたら何冊も持参したノートが空白のままであったということ」などでした。

父からの予備知識があったので、ワークショップの会場で戸惑うことはありませんでした。最初の長い長い沈黙も、「これが、あの沈黙なのだ・・・」と冷静に会場を眺めていました。やがて、グループが分かれるような展開になったのですが、私はさっさと大会場を後にして、少人数のグループと行動を共にしました。そのグループには、お目当ての友田不二男は含まれていませんでした。友田不二男を見に来たのに、これでは困るなあと思っていると、事務局から、「夕食後の食堂に友田先生が出向くので、先生と話したい人はどうぞ・・・」と案内がありました。私は勇んで早めに食堂に出向き、友田不二男が座るであろう椅子の真ん前に陣取りました。やがて、友田不二男が現れ、私の目の前に座りました。食堂には私のあとから続々と参加者が集まり、押すな押すなの盛況でした。

私はそこで、友田不二男から二つの衝撃を受けたのです。一つは、友田不二男の「存在感」でした。それほど広くないスペースに密集して、何か役にたつことを話してくれるのではないかと期待して、じっと息を殺して見つめ続ける多くの参加者の視線にさらされながら、一言も発せず悠然と煙草を吹かし続ける、その「存在感」に二十歳を過ぎたばかりの私は圧倒されてしまいました。

もう一つは、誰も何も発言しないので我慢できずに私が発した質問への回答でした。私は、聞きかじりの知識で、「受容ということはわかるような気がするが・・・全面的な受容なんてあり得ないのではないかと思うが、その辺について教えてください！」と質問したのです。すると、友田不二男は、平然と少しも動じる様子もなく「分かりませんなあ・・・」と言ったのです。私は、当然分かってここに居るのだろうと思って質問していたので、あまりにも平然と「分かりません」と言い切る友田不二男の姿に、啞然として、驚くともに畏敬の念のようなものが湧き上がってきたのでした。「知らないからこそ、求め続ける」という姿勢で生きている人に出会った、初めての体験でした。

(文中、敬称は省略しています)

(了)